

# 文化財だより

第 19 号

平成18年 3月

発行 真鶴町教育委員会

## 集 語り継ごう 特 真鶴の昭和の生業と生活

なりわい くらし

真鶴の人手に頼った漁業、石材採掘、回船、柑橘栽培。祖父・祖母・曾祖父母の汗の結晶が生んだ地場産業。そして、それを支えた町の中に住む腕の冴えた職人、諸職（鍛冶・船大工・石工・曲物・機械道具の修理業）の人々。強力に時宜に合った産業へと支援した商家の対応。

心の糧となった大漁唄・仕事唄・おまつり。同業者、隣近所のお付合い。天地風水火全てに神が宿ると、朝起きれば井戸へ三押し、水で顔を洗い、太陽の恵みに感謝の祈りを捧げた謙虚な生活姿勢。日金・大山に安全・豊漁豊穫需要の拡大を祈願した心情。

みんなみんな語り継がれず、現代化の波は、海に囲まれ緑に包まれたこの真鶴の地までも押し流そうとしています。今、当時の世相を次代へ伝えないと、と考えました。

今回その一弾として、真鶴の鰯漁を青木秀夫さんに。潜ぎ漁を青木敬三さんに。造船船大工の実態を山橋好雄さんに。回船業の様子を白田寛さんに。最後のお林山廻りを青木アイさんに書いて頂きました。

昭和二、三十年代、戦中戦後の真鶴の世相について、ご存知の方は、教育委員会までご投稿頂けたら大変嬉しく存じます。



鰯 豊漁

沖網漁師の五十年

青木秀夫

大正十四年十二月の生まれで、父親が高浦漁場の大船頭だった私でも、戦争中の真鶴尋常高等小学校を卒業しますと、御多分にもれず東京の電気店へ住み込みで就職しました。

昭和二十年、何時召集を受けても、真鶴に帰省していました。八月に終戦。一時、相生丸という石船に乗りましたが、当時は定置網漁をは

### 目次

特集 語り継ごう

真鶴の昭和の生業と生活 ..... 1

鰯 豊漁

沖網漁師の五十年 ..... 1

青木秀夫

美しき海に身を包む

潜ぎ漁に生涯をかけて ..... 3

青木敬三

真鶴の石材回漕

機帆船時代の思い出 ..... 4

白田寛

平成十七年度視察研修報告 ..... 5

櫻井武

船大工

竜骨木造船に取り組んだ

若き日の回想 ..... 6

山橋好雄

最後の御林山廻り

青木彦太郎の思い出 ..... 7

青木アイ

平成十七年度文化財保護事業 ..... 8

じめ各種の網漁は大漁に沸き、浜は活気ついていました。私は、この年の冬網漁から沖網漁の漁師となりました。二十歳のことです。

沖網漁場の落し網は、当時六艘の漁船と二艘のべか船で船団を組みました。船団の総責任者を大船頭と言います。大船頭を補佐するのが副船頭。それぞれの船には、船頭・表まわり・一般の漁師・古老・若者が乗

り組みます。漁船一艘に十五、六人、べか船には、二艘で十人程度の漁師が乗り組みますので、沖網漁場には百十人程の漁師が仕事に携わります。

炊きは、爺と呼ばれる古老が若者の指導に当たります。船には、じから(炬)が切っており、五徳・鉄瓶・釜などの炊事用具一式が揃えてあります。船中の食料、米・味噌・醤油・砂糖・塩などと、薪・炭などの購入は、地元数軒の雑貨店から買い入れ準備をします。古老は、出航前までに薪を鉋で鉋屑状にしたり、細木を作ったり用意、万端整えて乗り組みます。

漁船には「とば」と言っており、船の舷側片側に茅で屋根を作り、雨や飛沫を防ぎ船内を濡らさない様に工夫してありました。

落し網の大きさは、現在の網の約二倍もあり、「かけだし」から「羽口」までの魚を誘導する長さは、二百間(300m)海上での長さは一間が五尺です。端先から鹿島台までの網本体の長さは、二百三十間(350m)もあり、羽口から突通し左に曲れば運動場、その先端を「先潮台」と言います。突通しを右に曲れば、のぼり



網、箱網となり魚が集められます。そして先端が鹿島台と呼ばれています。

落し網の大きさと云えば、山の頂上から「浮子」の広がりを見れば、一目で見当が付きます。昔の網の浮子は、孟宗竹を束ねて作りしました。

鹿島台と先潮台の浮きは特に大きく、長さ十二尺(3m60cm)直径は四、五尺(1m20cm~1m50cm)もあり、「トンボ」と言う道具を使って締め入れます。「かけだし」といかり網の物でも、長さ五尺(1m50cm)直径二尺(60cm)あります。「かけだし」から始まって網全体を浮かせ

るようにと、無数の側竹が浮きの役目をします。「あの、丸太棒はなんだ」と驚きの声は夏目漱石の真鶴行きの文章から読みとれます。

海底に潜って見て吃驚、網の下は貝殻砂が敷き詰められていました。

大船頭は、海底の地形を把握し、潮の流れ(逆潮)や魚道を予測し網の立て方(張り方)を工夫します。

「海(海底)は生物だ」と言う人もいます。それ程、網の張り方は大船頭の裁量に係わるのです。

冬網が張り終われば、鰯の回遊を待つばかりです。房州白子浦(千葉県千倉町・三月二十日南房総市)の漁場で、鰯が獲れたと伝えられれば必ず三、四日すると真鶴で鰯が獲れると言われ、手ぐすね引いて待ち構えます。又、大山に雪が降ると鰯が獲れ始めるとも言えられて来ました。漁師はこの時を待つのです。

冬の寒い朝、白々と明ける頃漁師は浜に集まり、沖の定置網を目指します。銀鱗が波打っています。べか船は、のぼり網・突通し・運動場など網(側まわり)全体の破損の様子を調べ修理をします。

台船は鹿島台前に漁船一・二号は

箱網地の側に、大中(三号)はのぼり網と箱網の境に、五・六号は沖の側に位置取りました。全ての船が網締めを始めました。漁師は、両膝を船端に固定し、舷を抱き込むように、両手を伸ばし網に手を掛け「えい、ほ。えい、ほ」と声を揃えて手繰りあげ、大漁歌もとびだします。二号・大中・五号と台船上で、網を持ち鰯の水あげを始めます。何千・万と言う鰯が船べりに跳ね返ります。

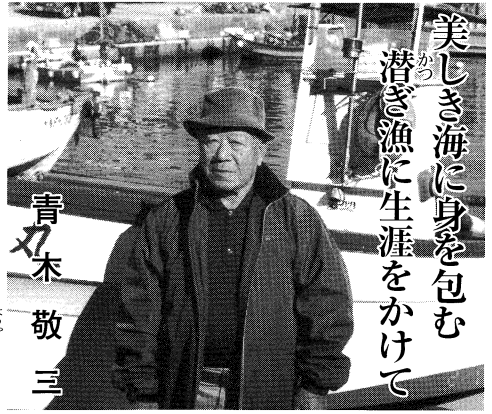
市場の魚見役は、目を凝らし、堤防上の魚見役を見つめます。堤防の上では、今か今かと此の時(大漁)の合図を待ちます。鹿島台近くの台船から大漁の合図が伝えられました。沖網の船団は、大漁旗を靡かせ港へと向います。

大正・昭和と大漁の続いた鰯網漁も、昭和三十四年の大漁を境に鰯の回遊が跡絶え、鰯漁へと定置網漁は変化していききました。

鰯に沸いた、浜の漁師の活気を今は見ることがなくなりました。あの頃の鰯を肩に背負った漁師の風物詩も考えられない今日此の頃、一寸寂しさを感じるのは、私一人だけではないと思います。

# 美しき海に身を包む

## 潜ぎ漁に生涯をかけて



青木 敬三

極暑の夏も過ぎ、今年は漸く涼風が吹き始めた十月三十一日。潜りも無事何事もなく終り、貴船中段の船玉竜神社と「いそべさん」へお礼参りをし、西念寺の先祖の霊にも報告を終え、家の神棚や仏壇にもお礼の祈りを捧げました。

「教育委員会から電話があったよ」と言われ、早速教育委員会へ出向くと、若い人が「真鶴の海士(潜ぎ漁)について文化財だよりに書いて欲しい」とのこと「だめだだめだ」と断わると、周りから「何時もお話している事を書いてくれれば」と煽られて、遂に引受けてしまいました。

私と潜水漁業との係わりは、港郵

便局の前に居を構えた「鮑庄」青木庄蔵さんの船に乗りトマイ(船頭)になった時に始まります。

岩の海女小屋から板海女の時は六人、半ギリ海女の時は二人を乗せて沖へ行き漁をします。

当時の海女さん達は、志摩の国崎相差・石鏡の方からの出稼ぎの海女で、漁期が終ると志摩へ戻りましたが、現在真鶴で生活している方も居ります。

三月からの漁期では、浜辺に海女小屋(カコイ)を作り薪を燃して暖を取り潜る準備をします。木綿の白い下着を付け磯襦袢を着て、浮き樽を抱え5〜10m位の深さの所を潜り貝を探します。

アワビは貝長9cm、サザエは貝のふたが3cm以上の物を採ります。小さい物は、種の保存と来期の漁を考慮採りません。

半ギリ海女の時は、二人を船に乗せ、船縁に分銅を引き上げる滑車を付け、海女は分銅を抱えて潜ります。トマイは一人の海女が底に着くと分銅を上げ、次の海女へと交互に潜らせます。10〜15m位の深場を潜って採るアワビは出貝と言って、岩のコ

シまた瀬に付いている物でメガイ・マダカが多く、浅場では石の下にいるクロを採ります。住み良い場所をツボと言って、沢山の貝が集まっているので大きい物だけ選んで採ります。

その頃、時々板海女と一緒に潜りました。海の水も綺麗で、今では見られないような光景を目にしました。サザエは産卵期になると、海中の岩の上に数多く集まり、白と緑の卵液を煙のように排出しました。ウミマツ・ゾウシヨウサンゴ……いろいろな海藻類、海岸生物は赤・黄・茶・緑・白と色とりどりに咲き乱れ、お花畑のような美しさでした。今では見ることが出来ません。

戦中・戦後まで、真鶴の漁業権を握っていた後藤磯吉氏から、漁業権等臨時措置法の制定や幾多の困難な経緯を経て、漁業権が完全に真鶴町漁業協同組合へ移ったのは、昭和三十一年十一月だったと思います。

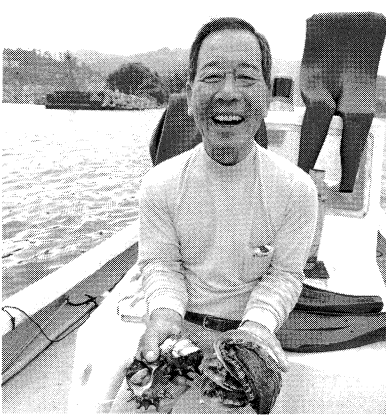
その頃、私は沖網の漁師になり、側廻り船に乗り網の張り立てや張り換え修理を専門にし、常に潜水作業に携わっていました。当時としては、珍らしいボンベを背負って潜る、潜水士免許を取得しました。

完全漁業権の移行により、真鶴町漁協の組織の中に海女組合が位置付けられ、魚介類の磯浜採取は、組合員となり「行使料」を支払えば、個人で漁が出来ようになりました。

個人として出漁するようになった私は、船で磯浜に行き十尋15m程度の深さまで潜りアワビやサザエなどの貝を採取して来ました。

昭和五十年代半ば頃から「採るだけでは駄目だ」と考え、アサリを砂混りの小砂利の磯へ放流したり、ヒジキを磯に植付けたり、浅場の投石魚礁には石についたカジメの移植も試みてみました。

また、東海水産研究所の平井政治さんがお隣りでしたのでアワビの放流実験のお手伝いもしました。



あわび、さざえの大漁の喜び

第一回は、亀ヶ崎と港内へマダカ  
第二回は、港内へエゾアワビ

を放流、棲息場所の違いか、水温の  
差か成長率は余り良くありません。

第三回は、マダカに標識を付け港  
内に放流し、移動の様子、成長の度  
合などを調べ記録しました。

他の漁場の磯浜の保護はどうか  
と、近くは横須賀市走水、遠くは天  
草、高知、徳島と磯漁場の現状はど  
うかと伺ったり、潜ったりしまし  
た。特に徳島県由岐町の阿部漁場の  
アワビ漁の推移調査や徹底した養殖  
管理漁業は驚きの一言で言い尽すこ

とが出来ません。

海に潜り、海の美しさに身が包ま  
れた時、頭に浮ぶことは、海底が生  
き物の安住の地として、互に持ちつ  
持たれつ生存する場であつて欲しい。

焼け磯にはしたくない。水質汚  
染、赤潮も困る。或る種の異常繁殖  
や乱獲も種の滅亡を導びきます。み  
んなみんな人間のエゴがもたらす付  
けではないでしょうか。「海には海  
の掟。山には山の掟」人間同士約束  
を守って生活をしたい。

「七七曲り、八十路を越えて、卒  
寿まで」生涯現役で過ごしたい。

## 真鶴の石材回漕

### 機帆船時代の思い出



私は十七歳の時、横須賀市浦賀に  
ある浦賀ドック住友重工に就職し、  
飛行機の部品製作に当たっていまし  
た。昭和二十年四月軍からの召集を  
受け静岡県浜松の航空隊に入営し、  
戦時下を明け暮れました。

終戦、除隊。真鶴に帰り定置網漁  
の漁師となり船に乗り組みました。  
定置網漁の漁師は秋網となります  
と、半分の人がきんちゃく網漁(巻  
き網漁)に従事します。そんな時、  
機帆船の運転が出来ることから、横  
浜で手広く活躍していた青木俊夫氏

から話があり達磨船を横浜まで廻送  
することになりました。これが船乗  
り水夫となった機縁だと思っています。

腰を据えて石材運搬の水夫となつ  
たのは、昭和三十四年十二月に株式  
会社鈴木組の船に乗ってからです。

三十五歳になつていた私は、若者  
が最初に経験する、かしき(飯炊  
き)はしませんでしたが、若者のか  
しきの手伝い、手助けはしてあげま  
した。かまどに薪を焼く火を熾し、飯  
を炊くのです。船に乗る前に付け木  
や薪を用意するのも仕事のうちです。

かまどに火が付きしました。船は上  
下左右に揺れます。釜から湯が零れ  
上を下への大騒ぎ、ガンタ飯になる  
ことも度々です。その都度叱責の声  
が響きます。釜の隣りで湯を沸かし、  
零れたら継ぎ湯をすることで難を逃  
れるのも生活から得た知恵でした。

五十トン級の木造機帆船には、五  
人程度の船員がいます。炊き・水夫  
機関士・船長と役は分かれていま  
すが、全員で協力して仕事をしなけ  
ばなりません。

石船のことです。石材の陸から船  
への積み込みは大変な作業です。  
五・六十キロ程度の石は、どんぶり



石材運搬台船を曳航する豊松丸

と呼ばれた特製の前掛けに抱くよう  
にして持ちあげ、岸から船に渡され  
たさな板を渡って運び入れます。時  
間が経つにつれ腕は痺れ痺れして来  
ます。それでも頑張ればと気を引  
き立てます。小石は、タンカと呼ば  
れた二本の竹竿に目の細かい金網を  
張り渡した道具に石を乗せ、二人一  
組になつて運び船の上で掛け声合  
せて石を落します。普段協力的でな  
いと、この時先棒の者は虐められる  
こともあつたそうです。

大石の積み荷の方法については、  
江戸中期以後の「カグラサン」(捲車)  
による積荷から一段と発達させ、機

帆船の中央にあるマスト・帆柱の間に、左右自由に動くように腕木を取り付け、その先端に滑車を付け、一トンから五トン程度の巨石を「カグラサン」と呼ばれる道具を四人の水夫が回わし人力起重機で高々と釣り上げ移動させ積み込みました。

この時だったと思いますが、一本のロープ（マニラ麻・しゅろ縄）で釣り上げる朝鮮玉という縛り方を教えられました。先代の社長から「きちんと朝鮮玉で結べ。適当に結ぶと危険だぞ」と常に注意されたことも遠い昔の懐かしい思い出となっていました。

マニラ麻のロープと言えば、帆ずれを防ぐ麻縄の結び方巻き方があります。マストを固定する、レケンワイヤロープが左右の舷（船縁）に張られています。このロープに一重輪のマニラ・しゅろ縄の輪を一つ作っては固定し又一つと連続して編んでいくのです。帆は風を孕んでロープに触れても痛みません。こんな技術は、今は見られません。

鈴木組では瀬戸内海播磨灘の家島より機帆船をチャーターしました。関西の石船で度肝を抜かれたのは、

百トン級でんとう船と言う船の構造でした。積み荷（石）を着岸舷の方に寄せて積み、着岸と同時に片方の舷を開くと船は傾むき、船中の石はガラガラと音を立てて岸壁に崩れ落ちてしまいます。右舷が終れば左舷と繰り返し一気に終ってしまいます。

これは便利だと早速鈴木組では、小澤造船所に依頼して、左右両舷が自由に開閉できるでんとう船（一号豊松丸）を建造してもらい実用を図りました。

石材の積み出し先は、三浦・房州から鹿島方面と伊豆半島一帯から清水港まで木造機帆船で運びました。三浦海岸や房総安房の海岸線は、磯石・天草石と呼ばれる投石用の赤ボサ石です。石目の粗い赤ボサは、海中で海草の温床になり天草や荒布・かじ布など大量に付着するそうです。

また、熱海や伊東清水港などの築港用石として、底石用として三十キロから五十キロ程度の石を搬送し海底を平らに均し、コンクリート堰堤（堤防）を造った後、今のテトラ代りに小松の巨石を運びました。

千葉の出光石油貯蔵施設地の造成

では、真鶴の大小の機帆船が石材を運びました。

昭和四十年頃になると現在の様な二百トン級の鋼鉄船（七号豊松丸）の導入が行なわれ、石材の積み下ろしも機械化され、六本爪のバケットが動力起重機によって、唸りを立て活動する様からは、一寸木造船時代の苦労は考えられなくなりました。



文化財審議委員会では十一月十五日、横浜市立歴史博物館と横浜開港資料館を訪ねました。

横浜市立歴史博物館では開館十周年を記念した特別展「よこはまの浦島太郎」展が開かれていました。この展示には、岩瀧門寺に伝わる「浦

島絵巻」が出品されました。

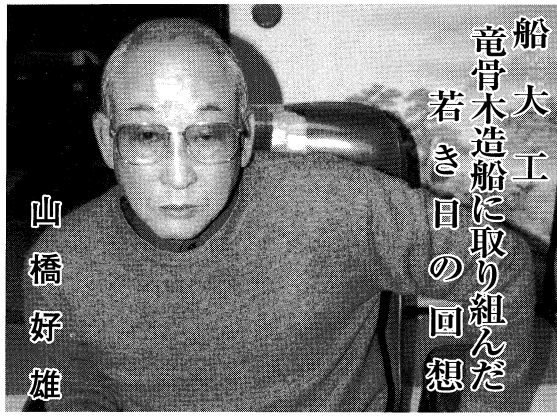
現在の横浜市神奈川区に明治時代まで観福寺というお寺がありました。このお寺は竜宮から帰ってきた浦島太郎が観音像と玉手箱を納めて建てたのがはじまりと伝えられ、別名浦島寺と呼ばれていました。江戸時代、東海道の街道筋にあったこともあり、多くの人々の尊崇を集める観光名所でもあったようです。現在でも浦島町の地名が残し、夏祭りには亀に乗った浦島太郎の像が山車に乗せられ、町内を巡るそうです。

博物館では、古くから日本人に親しまれてきたこの伝説と横浜という地域との関わりについて、文学、歴史、美術、工芸、芸能など多くの分野にわたる作品・資料を一堂に展示し、見るものに「何故、横浜に浦島太郎が？」という謎解きを体験させてくれるが、文化財の価値や奥の深さ、その大切さが理解できるよう工夫されていました。一方、岩瀧門寺にも何故「浦島絵巻」が伝わったのでしょうか？直接の資料がないためその具体的な理由はわかりませんが、横浜の特別展から、おそらく江戸時代半ばのある時期に浦島太郎ブ

ームが起こり、瀧門寺に奉納されたものだということが推察されました。文化を通じた地域間の繋がりを教えてくれるものでした。

幕末から明治にかけて、横浜の港作りに真鶴の石材が役立てられました

## 船大工 竜骨木造船に取り組んだ 若き日の回想



山橋 好雄

最近、四十年以上も前の船大工時代の事を、時々思い出しては一人て苦笑いをしてしまいます。

昨年十一月の末、小春日和の日の事だった。ペランダに置かれたテールブルの前の椅子に腰掛け眺めるともなく港を見ていました。石船・漁

た。開港にともなう横浜築港、明治三十年代の横浜ドック建設などです。開港資料館の展示から、幕末明治期の採石搬出事業の実態を訪ねました。

船・ヨットハーバーの船。「どれもこれも鋼鉄船・プラスチック船だ」……「木造船は見られなくなったなあ」……「そうだ、あれは昭和三十六年の事だったな」と、居間に戻り「平和」の青木繁太郎さんに依頼されて作図した数艘の「達磨船」を曳航する「曳航船」の製図を取り出し、船大工時代の喜びや苦しみ船に賭けた若き情熱と言うようなものを思い出しながら温かな日差しを浴び港と製図との睨めっこをしてしまった。

私の船大工時代はそう長くなく、昭和二十一年から三十七年までの足掛け十七年、青壮年時代の元氣盛んで意欲旺盛だったのかな。当時の造船は、ビーム（梁）とフレーム（肋骨）を結合する西洋形キール（竜骨）船と呼ばれる木造船の作図から造船までを一貫して横浜にあった齋藤造船所に依頼されました。製図も

青写真に必要な烏口で画用紙に書く時代から堅い芯の鉛筆を細く削り同じ太さで書き青写真に写す時代になったばかりの記憶も懐かしい思い出となりました。

さて、西洋形竜骨木造船の造船ですが造船に先だって用材の購入があります。しかし、私達船大工は直接携わらず、主人（社長）が山買いで購入していました。社長の口癖は、「木癖、人癖、船の癖、三つ合わせて船作り」でと、造船の基本や人間の在り方を教えられました。

造船工程を、先程の青木繁太郎さんの曳航船でお話しますと、一番初めに船主さんと船の大きさトン数を決める事です。木造船のトン数は容積で決められます。ですから、バドックライン（横断面・正面図）とウォーターライン（縦断面・船形面）の掛け算となります。バドックラインの船底係数（縦断面吃水線下の船底の形）が重要となります。

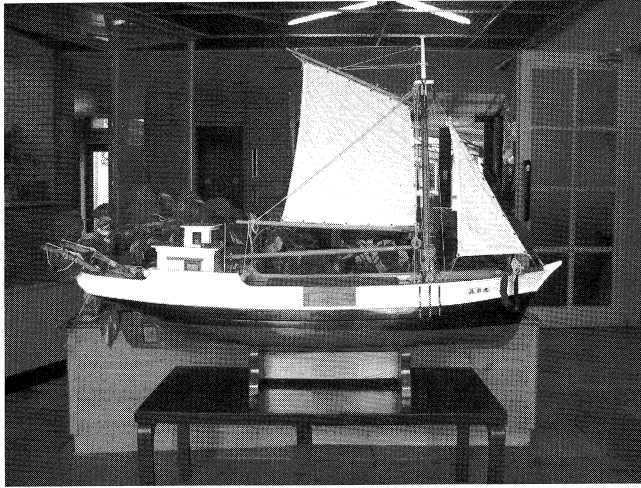
なお、軍艦は排水量トン数で、運搬船鉄船は重量トン数で表わします。いよいよ作図となりますが、木材の接合なども記入しながら、1/30か1/50の縮尺で構造図ウォーター

ライン（縦断面）とバドックライン（横断面）の二枚を図面に落します。そして縮図を原寸大に拡大し、横四ツ折りにして材料（木材）に転記します。木癖をよく調べて、どの用材とするかが腕の見せどころです。

ここで重要なことは、転記する材料の種類となります。キール（竜骨）と肋骨は櫂の木を使い、外板（舷側厚板・船側外板・外部腰板・船底外板）は杉材を使用します。櫂で作る竜骨の大きさ（幅・船倉から船底までの長さ）は、吃水線と係わり重要な役割を果たします。

肋骨は、レンガで言えば互い違いに積むフランス式と同様に船底部から二枚の櫂の板を繋ぎ合わせていきます。特に腰板部（ビルジ縦通材）には、櫂の根元を使用します。木材は養分や水分を吸収する為に根周りが広がります。その年輪の広がりを利用して、強度を高めるようにします。甲板前後に位置する肋骨は一枚板にします。肋骨繋ぎはボルト締めにします。船の強度を保つ重要な竜骨と肋骨が組みあがりました。

次は、外板部の接合、張り付けになります。ここで重要な作業は、船体



石材を運搬した竜骨木造機帆船模型  
寄贈 真鶴の文化を大切にする会

に合わせた杉の用材を選び「カガリ」とか「木挽鋸」などで製材し、大きな一定の形になるまでモータ付きバンド鋸で整形し、その後、諸刃の船手斧で手斧削りをします。荒材の出来あがりです。洋式造船では、外板製作の重要な方法として用材の「蒸し」があります。ドラム管の側面一箇所に小さな穴を開け横倒しにして水を注ぎ、穴の上に外板用材を蒸す覆い箱を乗せます。ドラム缶の下から火を焚き、水蒸気を覆い箱の中

に充滿させ横口から外板用材を差入れ充分に蒸した後、大きなハタ金(万力)で肋骨に添うように用材を捻り固定しながら肋骨に張り付けていきます。タックと呼ばれる1.3m長さ15cmの釘を一貫匁(3.75kg)の大ハンマーで打ち付けます。そして外板の間に「まきはだ打ち」を行ないます。西洋式造船は「①キールと肋骨を組む②外板を張る③甲板を形作る④内部の間仕切りをする」の順で進行します。

造船工程の重要な安全性を祈る起工式は、造船場にキールを据え付けて行ない。船霊様は工事が終わった時にエンジン室の後ろに神棚をしつらえて飾ります。昔は柱に穴を開け女の人の髪の毛を埋め込み安全を願ったこの話もあります。そして最後に進水式と成るのです。後から後から思い出る若き日の姿は、走馬燈の様に駆け巡り老いを感じる今日この頃です。

真鶴半島先端の御林は江戸時代はじめに松苗が植林されて以降、小田原藩による御留林、明治以降は皇室御料林として、長く民間による伐採が禁じられてきた。戦後国有財産に編入されたあと、昭和二十七(一九五二)年に払い下げられ町有林となる。二十九年県立自然公園に指定され現在に至っている。江戸時代の村勢要覧ともいふべき『真鶴村書上帳』(寛文十二・一六七二年)に、「御林山廻り人」が置かれていたことが記されている。戦中・戦後、帝室林野局(戦後林野庁)のもとで御林の保護育成にあたり、歴史ある山廻り役の最後をつとめた故青木彦太郎氏について、嫁にあたるアイさん(八十一歳)に思い出を語っ



最後の御林山廻り  
青木彦太郎の思い出

てもらった。

\* \* \*

「わたしがお嫁入りのしたのが昭和二十一年、おじいさんはその頃すでに山廻りの仕事についていました。もともとは「福本」という屋号で旅館を営んでいました。戦争で商売が続けられなくなるとお茶の販売に転じたそうです。立派な茶壺がありました。しかし物資の欠乏からそれも立ち行かなくなり、この仕事についたようです。私がお嫁にきた頃、すでに五年ほどとめていたと聞いたことがありますから、昭和十六年、太平洋戦争のはじまった頃からはじめたのでしょうか。戦後まもなく、これも五年ほどしてやめました。御林が町に払い下げられることになり営林署による仕事もなくなったからでしょう。おじいさんは昭和三十二年に七十一歳で亡くなっていますから当時年齢は五、六十代。山廻りの仕事は、戦中戦後にわたって十年ほどつとめたことになります。

\* \* \*

こんなことがありました。いまの町立幼稚園の場所に海軍の宿舎がありました。そこに外地からの引揚者の方たちが暮らしていました。おじ



対談する青木アイさん

いさんがその人たちの面倒を見て、御林の枯れ木を払い下げ、塩焚きをして生計がたてられるようにしてやったのです。塩をつくって平塚の農家に持っていく、農家はそれで味噌・醤油を作ったものです。

ガスも石油もない時代でしたから、一般の人たちにとっても毎日の生活に焚き木は欠かせませんでした。山の人は御林に取りに入るんです。でも国有林でしたから、本当は枯れ木・枯れ枝も勝手に持ち出すことは禁じられていました。でもそこは困っているのですから大目に見ていました。ただし、生木・立木を切ることは絶対いけないと厳しくしていました。「あんたのおじいさんにきついわれた」と、何度も愚痴を聞かされた覚えがあります。

一ヶ月に一度営林署の人がやってきました。箱根の国有林などをまわって最後に真鶴を訪れ、私の所に泊まっていたのが慣わしでした。

\*\*\*\*

いつだったか、漁業会と対立したことがありました。琴ヶ浜の上、今の岬と美術館方面との分かれ道あたりでしたか、そこらの木を切ることにしたのです。県からたくさんの人が来ました。すると漁業会は魚付林だから切っちゃいけないと、ひと騒動になったことを覚えています。

おじいさんは毎日ひとりでかけていました。朝、お弁当と「やせうま」と呼ばれる背負<sup>しよ</sup>子<sup>こ</sup>をせおってね。そんなに遅くはなりませんでしたが一日山に入っていました。道具は小さな鉋を持っていく程度でしたか。木を育てるのに下草刈りなどもよくしていたので鎌も持っていたでしょう。私たちは普段畑仕事がありましたから手伝うことはなかったですが、一度枯れ枝を運び出す手伝いをしたことがあります。昔の御林はいまのような自動車道はなく、鬱蒼と

木が生い茂って怖いようでした。普段人が近づけるような場所ではなかったのです。時々キラゲを持ってきてくれたくらいで、山の幸のようなお土産はなかったですね。山の神のお祭りの日には赤飯をあげていました。そうそう一度、お嫁に来て少しした頃、「三ツ石を見せてやる」といって、おじいさんに潮のひいた岬の先端まで案内してもらった事があります。優しい人でした。

\*\*\*\*

おじいさんは良い・悪いのけじめには厳しい人でしたが、困っている人がいると捨て置くことができない質でした。引揚者の人のこともそうですが、火事で焼け出された人の面倒をみたこともありました。昔は貴船神社あたりから岬方面は海でした、戦後ここに道路を作ることになりました。御林のことを一番知っていた人ですから、その仲介役をかってました。また、小学校の下にあった昔の公民館を建てるのにも尽力しました。町のためにも労を惜しまない人でした。福本の彦太郎といえ

ば知らない人はいませんでした。

聞き手 櫻井 武

## 平成十七年度文化財保護事業



くすのぎゼミ「真鶴古道実地研究」案内

### ◎文化財広報啓発事業

・文化財だより第一九号発行

・町民センター・民俗資料館展示事業

各施設で年間六回の企画展を実施

### ◎文化財審議委員調査研究事業

十一月十五日、横浜市歴史博物館及び横浜開港資料館へ研究視察を実施

### ◎文化財審議委員協力事業

教養講座「くすのぎゼミ」に講師として協力

ご投稿いただいた青木秀夫氏のご逝去をいたみ、お悔やみ申し上げます。